

## 第 39 回抗加齢・統合医学勉強会報告

日時：2019年7月20日 17:00-19:00

場所：東京アメリカンクラブ 小会議室-I

参加者：岸原千雅子（アルケミア：こころとからだの相談室代表、(株)インテグリティ代表取締役、臨床心理士）、中田光紀（国際医療福祉大学赤坂キャンパス公衆衛生学教授）、山本勇人（山本歯科医院院長）、山本夫人、岩田明子（心理カウンセラー）、村上篤良（TBS）、熊丸裕也（AOI 国際病院副院長、抗加齢・統合医学研究室長）

今日は、我々が自己治癒力の会で集まっている頃から、ホリスティック医学協会事務局長として活躍され、浦尾先生と僕らでシンポジウムを開催した時にも尽力いただいた、岸原千雅子さんにお話ししていただきます。その後臨床心理士の資格も取得され、ホリスティックな心理カウンセラーとしてご活躍中です。今日のテーマは、「レジリエントで持続可能な健康のために～分化・統合・協働～」ということでご講演いただきます。（山本）

まずはレジリエンスという言葉について説明したいと思います。

ストレスという概念が、ハンス・セリエによって物理学用語から引用され広まったのと同じように、レジリエンス「resilience」も元々物理学用語でした。語源となるラテン語の「resilire」は re(再び)と salient (跳ねる) からなり、「ストレス（外力）による歪みを再び跳ね返す」「弾力的に元の形状に戻る」という意味を持ちます。

この言葉は多くの分野で使われて来ていて、生態学では、エコロジー・システムの復元力をあらわし、土木工学では損傷を受けた橋や建物など、建造物の回復性能に使われています。さらに心理学では流派を超えて重要なテーマの一つとして扱われています。人間性心理学で著名なビクトル・フランクルは、その著「夜と霧」で、ナチス収容所での自身の体験を描き、愛する家族、財産、生きる権利、自分を支える全てを奪われて、いつ果てるともない絶望の淵でも、生きる意味を見出すことができる、としています。それを彼は「悲劇の中の楽観主義」と呼びました。

（レジリエンスについては、2018年1月13日の第29回勉強会で講演してくれた、日本医科大学多摩永山病院精神神経科部長吉川栄省先生が、「うつ病について」の中で、ストレスを跳ね返す抵抗力・能力と解説してくれた事がありましたね。：熊丸注）

私の赤坂のオフィスをご紹介します。アルケミアという名前でも、赤坂サカスの隣になります。ここはTBSがあり、このサカスの中央にあるビルに博報堂などが入っています。すぐそばには桜坂があり、TBS のマラソンのゴール前になります。ここで私は個人カウンセリングを行い、ご夫婦などのカップルの療法、さらに家族療法もやって居ます。参考資料として配った「家族の発達臨床心理学」は今月からスタートした連続講座です。これはレジリエ

ンスそのものですが、家族の危機をどう乗り越えて変容・再生していくかというテーマです。家族それぞれに発達課題があり、歳をとってからも発達課題があるので、それをどう統合していくかということになります。

他にはシャドウと言う内容のテーマも取り組んでいます。私の夫と私が行うカウンセリングですが、最近姪が仕事を手伝ってくれて居ます。彼女は証券会社で金融の仕事をして居ましたが、これから心理学の勉強をして協力してくれることになりました。

シャドウというのはなんですか？（熊丸）

シャドウと言うのは資料にも書かれて居ますが、私たちの心の中で、これが自分だと思って光を当てている部分と、影になっている部分を合わせて、ホリスティックなものだと言う考え方があります。ユング心理学で出て来た（ユングが命名した）ものです。このシャドウに最も注目しているのが、トランスパーソナル心理学の K. ウェルバーと言う人で、彼自身かなりの瞑想や、宗教的・伝統的な修行をやって来ました。しかし一人で修行をやっていただけでは、「関係性」が失われてしまうと気づき、自分のシャドウを統合しなければいけない、と考えたのです。トランスパーソナルな実践のためには、瞑想・修行だけではなくシャドウワークが必要だと唱えました。それによってホリスティックになり関係性、つまり横糸も繋がっていくと言うのです。

最近行なっているのが、ファミリービジネス・コンサルティングです。私と夫がオフィスで家族療法をやっているなかで、相続の問題、事業承継の問題が浮き彫りになり、これが原因で家族が争ってバラバラになってしまったと言うケースが少なくありません。バラバラになってしまってから心理療法に来るのが多いのですが、それまでには法律（弁護士）や税理士、経営コンサルタントに相談してお金を使い果たし、どうしようも無くなって最後に私たちのところへ来る場合がほとんどです。それで経営のこともわかるべきだと、ファミリービジネスコンサルティングを勉強して認定資格を取り、ファミリービジネス・アドバイザー協会 FBAA で 2017 年に講演会を開きました。

病院やクリニックでも、今は本当に後継者不足で、親は継いで欲しいのに子供が継いでくれないと言う悩みで、この夏も地方の某病院に訪問してコンサルティングする予定です。

ファミリービジネスは日本でとても多いと思いますが、この FBAA と言うのはアメリカの組織ですか？（熊丸）

アメリカには FBI（ファミリービジネスインスティテュート）と言うのがあって、そこの先生方が日本に顧問として来てくれて研修をしたりしてくれます。FBAA は 7 年前に日本で立ち上げたものです。

思い込みかも知れませんが、ファミリービジネスは日本に多くてアメリカにはあまりなさそうですが？（熊丸）

仰る通り、日本にはファミリービジネスがとても多いのですが、この FBAA の理事長は西川さんと言う日本の方で、ファミリービジネスであるジョンソン社と言う会社のノンファミリー社長をずっとされて居た方です。その他、カーネルという穀物会社もファミリービジネスで、欧米ではイタリアがファミリービジネスが多い国ですね。ラクジェリーブランドのは、GUCCI、FENDI、Ferragamo、PRADA など皆そうですし、車の Ferrari もそうですね。Gucci はファミリーで揉めて、最後は後継者が射殺されてしまいました。マフィアによって内紛を起こさせられて、奥さんが怨みを持ち後継者を殺し屋を雇って暗殺させたのです。餃子の王将の社長もそうだし、大塚家具も親族で揉めたのは有名ですし、岡山の林原研究所も潰れてしまいました。逆に上手く行っているのは、ジャパネットたかたです。

中国もいくつかありますが、韓国は、LOTTE、SAMSUNG、大韓航空、ヒュンダイ（現代）もそうですね。東南アジアではベトナム、フィリピン、マレーシアにもあり財閥の形が多いようです。

レジリエントで持続可能な人生と言うものは、命は常に変わり行く物だと言うことを理解して考えていかねばなりません。植物も動物も人間も、同じ所、同じ状態で留まっていることはあり得ず、どう変わっていくかを考える能力が備わっているのが、私たち人間であり、我々の特権です。勿論 90 歳になっても変わり得るわけで、どうせならば良い方へ変わって行きたいですね。その為には何処でどうつまづいたか？がわからないと、躓いているだけで、中々レジリエンスを発揮するのは難しいのです。

これらをどう見ていくかが心理学に知恵がある分野なので、今日はそれに付いてお話ししたいと思います。

キーワードは横の繋がりです。統合のあと私達は何をするのか？という、先程言ったように「関係性」が大切です。自分一人で統合したとしても殆ど意味がありません。どうやって繋がったり、協働したり、絆を保っていくか、その横系の部分とあとは縦系の部分が重要になります。縦系は「承継：Generativity」、これはエリク・エリクソンの言葉で後に説明します。この縦と横がうまく機能すると、抗加齢、長寿ということになるのではないかと思います。

SDGs：Sustainable Development Goals（持続可能な達成目標）とは 2015 年の国連会議で加盟国 193 国が 2016 年から 2030 年までに達成する目標で 17 項目あります。3 番目は医療となっています。

エリク・エリクソンの心理社会的発達段階について説明します。彼は人間は死ぬまで発達すると言った最初の人です。彼はそれぞれの発達段階に到達するテーマ（目標）があると考えました。

**乳児期**（0 歳～1 歳半）：他者との間で基本的な信頼を持つことが必要。実際には母親との関係において信頼を持つことで、生きていていいんだと言う「希望」を得る。その反面、不

信を抱くこともあるが、その両極の間で、発達していく。

**幼児期** (1歳半～3歳) : 自分で出来るんだという経験によって、自律性を持つ。しかし失敗することによって、恥・疑惑を感じるようになる。この過程で自分という「意志」を持つようになります。

**幼児後期** (3歳～5歳) : 自律性や意志を持つようになると次に「目的」を持つようになる。友達が欲しいとか、特定の玩具で遊ぶとか、積極性を持つようになる、その反面、ママの言いつけを守れないなどの罪悪感を持つようになる時期。(罪悪感が強すぎると積極性を持ちにくくなる。)

**学童期** (6歳～12歳) : この時期には、勤勉性を持って様々なことを習得して行き「有能感」を獲得していく。反面、自分にできないことがあって友達より劣っているという劣等感を持つ場合もある。

**青年期/思春期** (13歳～20歳) : この時期は親からも独立できず、環境の変化も大きく、実はとても辛い時期でもあるけど、自分は何者なんだ、つまり同一性をこの時期に獲得していく。この Identityこそエリクソンが提唱し有名となった点であり、これによって「忠誠心」を獲得していく。それがうまくいかないと、同一性の拡散が起こり、モラトリアム(エリクソンが社会経済学的な用語を流用して、社会的責任を一時的に免除或いは猶予されている青年期とした)な状況になる。

**成人期前期** (20歳～39歳) : 一般的には家族を形成していく時期で、親密性がテーマであり、一番親密な人と親密な関係を築いていく。ここで横の繋がりを大切に、「愛」を獲得していく。これは忠誠心が前提としてないと難しい。反面、孤独を感じることもあるがそのバランスの中で、愛が確立していく。

**成人期後期** (40歳～64歳) : エリクソンを有名にしたもう一つが、生殖性 (世代性 : Generativity) で、「承継」とも訳されますが、次の世代に繋いでいくということです。これがないと、次の世代にバトンを渡していくことができなくなり、人生は停滞してしまいます。この時期に獲得するのが、「世話」となります。

**老年期** (65歳～) : この時期には英知・賢さを獲得して行き、ここで初めて私たちがやってきたことが、統合されるのです。これが難しいと、絶望という感覚にとられる場合があります。

十牛図はごぞんじですか？

東洋の禅の考え方なのですが、最初若者が同一性を獲得するのに、牛を探すのです。牛を手懐けて、牛に惹かれて悟りを開いていく過程なのですが、悟りを開いた後、最後は自分もなくなって、世界も消えてしまっ、その後もう一度子供に戻るといふものです。禅の考え方なので、出来事が循環するのです。

この十牛図の考え方は、老年期の統合に繋がるかもしれない。

配布資料 4 ページの 6.自己実現～自己超越のピラミッド (A.マズロー) について

よく見る図ですが、マズローの人間性心理学、これはレジリエンスの解説で出てますビクトール・フランクルもその代表的な人です。

第 1 の心理学は科学的な心理学であり、第 2 の心理学は精神分析とされています。フロイトの精神分析は第 2 心理学です。人間性心理学は第 3 心理学と言われていて、クライアントとセラピストが上下関係ではなく、共に実存的な存在として認めていくことを提唱したのがマズローで、さらにカール・ロジャースもその一人です。又、マズローは第 3 心理学から第 4 の心理学への移行期の人物です。第 4 の心理学はトランスパーソナル心理学のことを言います。

マズローはビジネスの世界では自己実現の人と言われていますが、晩年に自己超越つまりトランスパーソナルということを提唱した人です。マズローの理論は欲求段階説であり、私達がある欲求を満たすと必ず次の段階の欲求の段階に入ると考えました。彼のピラミッドを見ていただくと、一番底辺、最初の**生理的欲求**が満たされると、**安全の欲求**が出てきます。この図で下の段階の欲求が満たされないうちに、上の段階で欲求を満たしてしまうとバランスが崩れてしまうので、被災地では先ず生理的な欲求を満たした後で、安全の欲求を満たすべきだとされています。その次の段階は**社会的欲求**で、友情、家族、愛情など親密さの欲求を満たすべきとなります。そこが満たされると次は、人に認められたいなどの自尊心の段階に入ります。その次には、私達は**自己実現の欲求**で、道徳、創造性、自発性、問題解決などを成し遂げていくのです。そこが満たされれば、自己超越（トランスパーソナル）の段階に入るとというのがマズローの理論です。

こうしてトランスパーソナル心理学と統合ということになって行きますが、もう一つだけお話ししておきたいことがあります。マイケル・ウォッシュバーンという、元々は哲学者でユング心理学とトランスパーソナル心理学を結びつけた人がいます。今まで説明してエリク・エリクソンやマズローの理論を踏まえて、トランスパーソナル心理学の発達論に触れたいと思います。

資料の左、自己性の展開を見てください。これは時間軸が下から上に上がっていますが、第 1 段階である一番下は赤ちゃんの時です。この**根源的源泉**は自分の基盤となる根本的エネルギーを指しています。そのエネルギーは完全に母親に依存しているのがこの時期です。実質胎内にいるようなレベルだが、母親の体からは出てしまっていて、エネルギーはお母さんから充足してもらえない。そうして徐々に成長していく時期です。この源泉（ユング心理学でいう Great Mother）の中で自我は力動的基盤から最小限にしか分化していない。**自我の芽生え**として存在し、まだ基盤に沈み込んでいる状態です。

そこからちょっと成長すると、私たちの心は**身体自我**に成長し、身体と同一化しています。心身症というのは、心の問題を心の事として扱えなくて、身体に病気が出るのですが、身体自我のケースが多いのです。この場合次の段階である精神自我まで発展して、心の問題を身

体でなく心のもので捉えるようになると、身体の病気が治るとされています。根源的源泉はこの段階で原始的自己となりますが、まだ Great Mother の内面の次元です。

次が第3段階で、**精神自我**とは、我々が私（自分自身）になる段階です。私が私でない存在つまり Great Mother（母親）から離れるのです。ここに書かれているデカルト的自己、つまり心身二元の身体と心が別だという心になるのです。こうなる為に今迄力学的基盤としていた Great Mother から自分を切り離さなければなりません。心と身体を切り離す、区別する事で初めて、トランスパーソナルな、スピリチュアルとか統合ということができるようになります。この点が混沌としていると、スピリチュアルでなくオカルトになってしまうのです。

こうして、ゲシュタルト心理学で言うゲシュタルトの歌にあるように、「私は私、貴方は貴方、私は私の道を行く、貴方は貴方の道を行く」と言うふうになり、これで初めて、分化、協働、統合が実現できるのです。

ここがパーソナル(自我)の段階で、ここまではプレパーソナル、そしてこれから先がトランスパーソナルの段階になります。

この精神自我から原抑圧によって、かあちゃん（Great Mother）から一旦離れるものの、根源的なエネルギーなので、もう一度この Great Mother と一体化する必要があります。一体化するのは主権を持つ霊（spirit）です。それを詳しく説明しているのが、配布資料右側の三相発達です。この中の4段階目を見てもらうと、「**超越に奉仕する退行と霊における再生**」と言う段階があります。これが中年期の鬱で最もよく出てくるものです。精神自我を形成して自分で成功を収めて、ああ、これが自分の人生だと思ったときに、鬱になりがちなのです。子供を育て上げて、これでよかったのだろうか？社会的に成功を収めた後で、自分のやりたかったことは本当にこれだったのだろうか？ということによって鬱になることがあります。このことをトランス・パーソナル心理学では、「超越に奉仕する対抗」と言います。

せっかく抑圧して分かれた霊（spirit）にもう一度戻らなくてはならないのです。但しこの段階では一度作った精神自我なので、グレートマザーのように飲み込んでしまうものではありません。霊の方も私たちに会うことが出来るように変容しています。このために私たちには退行が必要で、このときにうつが起きてしまうのです。

この段階では根源的基盤に戻り、接しますが、根源的エネルギーに依存するのではなくて奉仕が出来るようになっていくという違いがあります。それによって「統合された自我」が実現します。こうして、図の一番上の段階に書かれているように、**超-自我段階**として、統合、協働が出来るようになるのです。

ここまでが私が今日お話ししたいことの殆どですので、後はフリーディスカッションでも宜しいかと思います。後はご興味があれば、配布資料の2. 病態水準の種類なども参考にしてください。

順調に進んでいく発達はお話しいただいたようになるのですが、例えば両親がいつも喧嘩して揉めていて、離婚してしまう。更に自分は友達に虐められて首吊ろうと思ったとか、更に社会に出たら、手形で騙されて破産してしまうとか、様々な形で精神的に破壊され

てしまうようなダメージが起こる、続く場合、どういう展開を想定されるのでしょうか？  
(村上)

そのような場合は、マズローのいう自己実現の、生理的欲求、身の安全の欲求、社会的欲求のどれも満たされないまま進んできているので、身体自我も精神自我も確立する前の段階での問題ですね。

上述の状況までアンバランスな発達をしていますが、そこから基盤に戻ることはあり得るのですか？ (村上)

その状況でも一部は基盤に戻る場合があります。これはビクトル・フランクルがユダヤ人の強制収容所に入れられたとき、全てと家族を失い、命の保証もないような想像もつかない状況になっても、希望を持ち続け、レジリエンスを保ち続けていたという点がその例となるでしょう。

タイタニック号の映画で主人公が自分を犠牲にして彼女を板の上に乗せて、沈んでしまう場面、釈迦の話にあるウサギが飢えた狼のために自分が火の中に飛び込んでしまう話などは、親子でどちらか一人しか助からない状況になれば、親は普通自己犠牲の上に子供を救うでしょうけど、どう考えたらいいのでしょうか？ (村上)

それは、一つには自分の命に変えても大事な存在ということを感じられる心があるということだと思います。私のところに相談に来る親御さんは、こんな子供なら死んでくれた方がいいとまで平気で言う人がいます。自分の思い通りにならない子供、と言っても良い学校に通っていたりするんですよ。でも自分がいけなかったハーバードに入れなかったと言う親がいます。お子さんはアイビーリーグ (5 スター) の学校に行っているのに、こんな娘なら死んでもらった方がいいと言うのです。ちゃんと成熟して成長していないと、自己犠牲という気持ちは持てないと思います。

その場合は母親に問題があるのですよね。子供は問題がないはずです。(中田)

子供はちゃんと応援されて成長して行って良いんだということを再認識できる様にカウンセリングをしていきます。今ので答えになっていますか？

微妙ですが、ノーベル賞受賞者の利根川さんは、自分の息子に同じようにノーベル賞を取るように期待しすぎたためか、その息子さんは自殺してしまいました。このハーバードがらみの親子の例はそれに近いものがあるかと思います。それ以外でも、予期せぬ不幸が起きたときに、そこからまた基盤に戻って成長し直すと言うような場合もあるのでしょうか？ 或いは全体が破壊されてしまうようなこともあるのでしょうか？ (村上)

全体が破壊されてしまうと言うことは、やはりレジリエンスが働く限り、そう簡単に終わりにはならないようです。でも本当の不幸は、もうどうしようもないような不幸なことが

怒って、初めて気付く事で変わる、つまりそうなるまで変われないと言う事だと思います。

しかし子供が自殺するまで変容できないのはあまりに悲しすぎますよね。実際にはそれをきっかけに変容したご夫婦も居ます。ただそうなる前に、予防医学的に対処できるべきで、ポジティブ心理学の意義はそこにあります。ポジティブ心理学は精神分析に対する批判として生まれたものです。医学も病気を診断して治療するのではなく、未病状態を見つけて早めに対処する東洋医学、ホリスティック医学と似ています。精神分析というのは心を分析して何かが明らかになって治っていくというものですが、それだけでは、今までを振り返って現状を把握するので過去を見るだけです。ポジティブ心理学は未来を見てこれからどうすべきかを考えていくものなのです。マーティン・セリグマンという当初は青年期の学習性無力感の専門家だったのが、或る日突然ポジティブ心理学の人になりました。

もちろんポジティブ心理学だけでは、先ほどの例のようにこどもが自殺してからしか変容出来ない、ガンになってから病院にくると同じで、全ては解決しません。レジリエンスも基本的には研究であり臨床的なものではありません。

こういう外的な要因の場合以外に内的な、たとえば遺伝子の影響はどうでしょう？日本人女性はネガティブな思考の遺伝子を 9 割の人が持っているという説もあります。急にシンデレラのような恵まれた状態になったときに、私はこんなに幸せで良いのかしら？という傾向です。このような遺伝子を持っている人が成長して行くにあたって何か精神的サポートとかノウハウが有るかなどどうなのでしょう？（村上）

その点は私たちの心で考えることになります。3 ページに記載した、**マーガレット・マラー**（ハンガリー人）の乳幼児発達理論を見てください。この人は分離・固体化のプロセスを提唱しました。我々が成長発達して何かになっていくとき、分離と固体化を繰り返して起こしてくると言われています。例えばシンデレラでは、今までは灰をかぶって、母親、姉たちにいじめられてきた彼女がある日突然王子様に見初められて、宮殿で暮らし、お姫様になる。それって今までの私から新しい私になるのですが、こういうときに私たちは必ず分離不安というものを感じます。私、そんなことができるのかしら？幼稚園に行き始めたら、何か怪物がいるのでは？ママの所が安心では？慣れ親しんだところから、新しいところへ変わるときこういう必ず不安を抱くものです。その事と関係していると思われま。その遺伝子があるとしたら、それは自己保存のために必要な遺伝子だと思われま。でも次の段階に進むためには、幼稚園に行く、中学に行く、転職をする、アイデンティティを変えるには、この分離不安を超えていかなければならないのです。

ここでマラーの発達理論は役に立つのですが、まず母親から身体が離れ始める分化期が分離—固体化の第 1 段階です。そしてハイハイを始めて、自分で色々なものに触り口に入れて、おでこをぶついたりする練習期が次の段階。このときに後ろでママがみてくれると言うのが大事で、そうであればいろんな冒険ができます。この時期は世界に恋してるといいますが、それはママが後ろにいるからなのです。シンデレラの場合は、見守るママに当



たるのが、魔法使いなのかもしれませんが王子様かもしれません。そして一番大事なのが、再接近期の時期で、ここで失敗すると境界性パーソナリティー障害になると言われています。幼稚園に始めていくと泣いたりするのですが、友達が出来たりしてすぐに楽しめるようになります。それで帰宅したときに、母親が「どうだった？楽しかった？そう、良かったわねえ」と言ってくれれば、これを再接近と言うのですが、安心してまた明日行こうと思うのです。ママから離れて、次のアイデンティティになることができるわけです。こうしてネガティブ思考の遺伝子があっても、私は私になって良いと言う応援が必要なのです。

遺伝子を事前に調べておいて、陽性の人には心理学的にどう対処するかを計画していく必要があるということになりますか？（村上）

遺伝子があってもそれを抑制する遺伝子もあるから、遺伝子の有る無しではどうだろうか？米国で以前交代勤務に向かない遺伝子を持つ人に、同意を取らずに事前に調査をして問題になったこともありますよねえ？やはりどう使うかが大切では？（中田）

初めてのお使いと言うことがありますが、この試行錯誤で練習期がクリアされ、帰ってきたときにママが見捨てずに迎えてくれることで、再接近期がクリアされます。これはエリクソンの自律性を書き疎くし意志を持つようになる段階と重なりますね。

私は欧州に住んだ経験がありますが、あちらでは父親が金銭的にも全て管理をしていて、教育費やどのようなノートを買うかまで子供に意見したりします。先生との面談も父親がいくのです。これをみて私はカルチャーショックを受けたのですが、母子の分離と言うことですが、あちらでは父親が自立を促すのです。なので臨床現場では特に日本の場合、少し違う部分があるのではないですか？（岩田）

僕もエリクソンやマラーの理論は既知ではありますが、白人を対象としたものであり、やはり日本人には当てはまらない、体験内容や順番が違う部分もあるのではと思います。（中田）

それが実は臨床的には、日本でもとても役に立つのです。マラーの発達第2段階は10ヶ月のハイハイが始まる時ですが、これは欧米でも日本でも一緒に、練習期から再接近期への移行時期も同じくで、物理的な母親でなくても良いのです。二者関係の養育者から離れていくと言うことです。次に第3者が入ってくることが大切で、それが出来ないとし自己愛性パーソナリティー障害を起したりします。養育者は母親でなくてはならない訳ではないので、日本には当てはまらないと言うことはありません。

日本の場合は母親に支配されてしまうケース、いわゆる Great Mother 的な場合が多いと思いますが、そう言う日本の特徴に対して、何か工夫されていることはありますか？（岩田）

仰る通り日本では母親の支配が強い、それは身体自我の段階で母親自身が発達が進み切っておらず、娘も同じ状態にいるのです。ここを脱するためには、まず娘の心が育っていく、

そして母の心が成長していくという両方が必要になります。この心の万代は様々なものが出てきます。分離不安がその一つで、もう一つは罪悪感。娘が母を置いていくのは良くないのでという気持ちもあります。罪悪感70歳の男性でも感じたりします。母親を施設に入れることはいいのだろうかという例です。

摂食障害は母子密着のテーマなのですが、お母さんの事を思っている子でいなくてはいけないというテーマです。このときにお父さんの存在は重要で、お母さんを安心して任せられるお父さんがいれば、改善していくのです。

うちの学生は、リストカットから、パニック障害（授業中に発作）など、ことある度に僕が呼び出されます。授業中にやる学生もいます。（中田）

以前は傾向が違って、高校生が多くトイレでリストカットというのが多かったですね。

うちの学生はリストカットするものが15%（60人）もいるのです。特に心理学科が多いです。カットの深さで本気度が解ったりもします。ある女子学生は失恋したからといってリストカットしてその写メを元彼に送りつけたのです。大騒ぎになって、自分が出て行き親に報告するぞといったら、「親に言ったら本当に死んでやる。」と。相手や我々を困らせるのですね。それが嬉しいらしい。すぐ委員会を立ち上げて学内で討議して、結局僕が親を呼び話しました。（中田）

最近小学校でもクラスに2、3人授業中に歩き回る生徒がいるなどよくあることです。小学校の担任の先生はそれに対処する訓練、教育を受けることが求められます。しかしそれでまかり通ってしまうので、それこそ成長しきれず高校から、今や大学までその状態で進んでしまうのです。

あ、大学生でも徘徊（ADHD）するなんて多いですよ。後、授業中に何人かでポテトチップスを食べ始めたり。それで僕が呼ばれて対処します。そこで怒ってはいけないので、「お前らには食べる権利はない」といって僕が食べるのです。もう僕はオールマイティーに何でもやらされてます。（中田）

ADHDは唯一治療薬があり3種類良い薬があるので、対処可能ですよね。それと今までの十把一からげな軍隊方式の教育で半もはやダメで、2020年からはアクティブ・ラーニングという、個別の教育に変わって行きます。机の並び方も軍隊方式でなく、コの字型になり個別に対応してそれぞれの個性を伸ばしていくのです。

最近はいくらスマホが普及して、もう小さい時から、まだ自我が確立してなくても他の人と繋がったりしていますが、それで問題も起きていますね。こういうテクノロジーの問題はどう考えるのでしょうか？（山本）

それは、テクノロジーをよく理解している人が、よく考えてどうすべきかを決めていくべ

きだと思えます。繋がるスピードな速さが、人間の自我発達を破壊するとは思いませんが、このテクノロジーをどう使っていくべきかは、特性をよく把握している人が考えるべきです。

喫茶店に子連れの母親が入ってきて、母親はいる間ずっとスマホを見てるとか、若いカップルが2人で席に座って向かい買っていてほとんど会話せずにスマホを見てるのは最近よく見かけます。母親の姿を見て成長した子供はそうようになっていくはずですよ。(村上)

中国では人工知能を相手に満足して、結婚したいという男性までいるようです。(中田)  
それは中国の国策でもあるのです。男性が余ってきているし、子供は増やせないし。SONYのAIを搭載したロボット犬アイボをずっと叩き続けていたら、ある時から「ウー」と唸るようになったそうです。そういう効果の逆に、甘い言葉や態度で慰めてくれるような女性像を与えて、億単位で一種の洗脳をして、人民を支配するという構想が、中国では有るとか？(村上)

そう言うバーチャルな彼女がいると言う近未来映画(ブレードランナー最新版)を最近やってみましたねえ。(熊丸)

バーチャルな彼女は不満を言いませんしねえ。自分に不満を言わないと言う一種の快楽は、身体自我なのです。精神自我まで成長するとそれが変わってきます。自分に反論したり、不満を言われたりすると身体自我レベルでは、不快に思うし、殴ってやろうかと思ったりしますが、これが変容の契機になるのです。自分に都合の良い、気持ちの良いことだけでは変容、成長ができません。

昔の村社会では、皆が同じ考え、自分というものが無い社会だから、それで成り立っていましたが、それは身体自我の社会なのです。夜這いすらも当然のことと黙認されていました。子供をたくさん産まない、村の労働力が足りないからと言う名目があったからです。

今でも夜這いは行われています、沖縄とか。(岩田)あ、四国の徳島でもファイザー時代の同僚が親の時代まではとっていました。(熊丸)

病態水準の所を質問したかったのですが、これらの点と、身体自我は関連がありますか？(岩田)

関係は有ります。身体自我は、マラーの発達段階で言うと、分化期(母親と体が離れる時期)から、ハイハイを始める練習期ですがこの過渡期の時に何らかのつまづきがあると、自己愛性パーソナリティ障害(PD)が起こると言われています。母親が子供を思い通りにしようとするような時、これは父親でも同じで、先ほど出た林原研究所も、素晴らしいファミリービジネスだったのに、三代目になる時に父親が母親と息子を、何で俺の良言うことが聞けないんだと叩きのめして、長男に継がせようとして、結局潰れてしまったのですが、これも身体自我が関わる、自己愛性PDになります。精神自我に成長しようとしているところ

(つまり再接近期になる所)で、自分でやりたいことをやり、私は私で良いんだと思って戻った時に認めてくれないと、見捨てられ不安と言われる、私が私になると言う事にまつわる不安によって、境界性 PD を起こし易くなるのです。

境界性 PD の人の方が自己愛性 PD よりもむしろ健康で、以前の精神医学でもなんでもかんでも行動化してしまう人を、境界性 PD と間違っていた時代がありました。

その後、資料の 4. に示す病態水準はカーンバーグと言う人が構造化したものです。それ以前、つまりフロイト精神医学では、病態水準は神経症と精神病の 2 つの水準に分類されていました。その後カーンバーグは、神経症の人格構造と精神病の人格構造として、現実検討能の有無、自我同一性の有無、防衛機制の内容で見ましたが、どうもどちらにも当てはまらない例があると気付いて、境界人格構造という新たな分類を作りました。ここを境界型、境界性という表現をしたため、自己愛性 PD と混同されてしまったという経緯がありました。

以前は大家族の時代で、例えば自分の父親は 8 人兄弟だったし、現代のような家族構成と違いがあると思いますが、それはどう影響しますか？(中田)

兄弟が多ければ、少し歳の離れたお兄さんやお姉さんが、親の役割を果たしたりして、その子の発達に影響してきてると思います。今のような核家族では違ってきますけどね。

あ、そろそろこの会場の使用時間がきましたので、これで終了としましょう。(熊丸)

以上、心理学とカウンセリングの重要性がわかる、興味深いお話でした。

熊丸